

子供達に未来を託し
～9回目を迎えたふれあい体験学習～

水津漁業協同組合 漁業研究会
事務局 津村正明

1. 地域の概況

私の所属する水津漁協は佐渡島の両津港から約18kmの東部に位置している。小佐渡山脈を背負い越佐海峡に面した海岸線20kmを有する長い管内で、13集落から成り立っている。

2. 漁業の概況

専業者は少なく、多くは磯漁を営む准組合員で、正組合員141名、准組合員325名、漁船数244隻で水揚げ金額は約3億円である。10年前に比べて水揚げ金額は半減しており、この要因としては基幹漁業であったエビ籠漁業6隻が1隻になったこと、銀鮭養殖事業の廃業、ワカメ養殖業者の減少などである。

3. 研究グループの組織と運営

漁業研究会は昭和45年に発足し現在会員は70名、会長1名、副会長2名、庶務会計1名、幹事12名で構成されている。

活動資金としては年会費2,000円、漁協からの助成費50,000円が基本である。また、研究会として「アジ養殖の研究やカスベ網試験操業」を行って活動資金に充てている。

研究会の在り方としては、漁協との連携を親密にして協力と信頼を大事にしながら事業計画の作成や実践をしている。主な活動としては「ふれあい体験学習」「海洋深層水についての勉強会」「水産物の有効利用としての簡易加工」「講演会や技術交流会」などであるが、特に今脚光を浴びている海洋深層水については低迷する水産業の活性化に結び付けたい思いで、積極的に勉強会を行い、深層水利用の先進地である高知県室戸市に視察研修（会員30名）を実施した。昨年5月には佐渡沖で汲み上げられた深層水を使って、小規模ながらボタンエビ（標準和名：モロトゲアカエビ）の飼育実験や深層水の氷を作り、鮮度試験を行った。

4. 実践活動課題選定の動機

専業者の年齢構成（表1）は高齢者が特に多く（平均年齢65.5歳）、若い人の少ない安定性のない逆ピラミッド型の構成で、しかも、平成6年以降は新規就業者もいない状況であり、年毎に高齢化が進行し、このままでは漁村の存続すら危ぶまれることが予想される。また、管内の子供達にあっては海辺育ちでありながら、海や水産についての知識や体験も少なくなってきた。加えて、子供達の魚離れも目立ち、食生活の簡便化志向がますます進んできている。

このような状況の中で、「少しでもこの地に育った子供達にもっと水産について知ってほしい」「体験によって魚好きや水産について興味や関心を持つきっかけになってほしい」そして、最も難しいとされている「後継者を育てたい」という本音が、会合や酒席でよく

話題として持ち上がっていた。また、県教育委員会が特色ある学校作りを推進していたこともあり、研究会として漁協、婦人部とも話し合いを重ねた上、地元の小中学生を対象とした「ふれあい体験学習」を実施することになった。

5. 実践活動の状況及び成果

(1) 「ふれあい体験学習」実践の基本

- | | |
|-----|--|
| ①主催 | 水津漁業研究会・漁家婦人部 |
| ②後援 | 水津漁業協同組合、新潟県佐渡水産事務所 |
| ③対象 | 管内小学生（3校）、中学生（1校） |
| ④会場 | 水津漁協（荷捌場、漁協大広間、漁港） |
| ⑤内容 | ・ 漁業体験（網はずし、網くり、漁船乗船、養殖魚給餌）
・ 調理加工実習（イカ、ホッケ等の調理や簡易加工）
・ 講演（漁師の体験談や漁法）
・ 試食会（当日の調理実習での料理品） |
| ⑥経費 | 主催者負担（調理料理の材料は漁業者からの提供）
計画の立案については事故の無いように安全に配慮し、できる限り子供達と主催者とのふれあいを深められるような内容にする。 |

(2) 実践の状況

体験学習は学校、水産事務所、研究会、婦人部との合同会議で子供達の感想や要望、学校側の意見も十分に取り入れながら、内容や実施方法を決めている。

魚の加工や料理などは体験の積み重ねによって上達してゆくものなので、毎年取り上げることにしている。その他の内容は年毎にできるだけ変えるようにしている。しかし、9年目ともなると中学3年生は9回「ふれあい体験学習」を経験したことになるので、飽きるのではないかと心配になり、学年で内容を変えたらどうか、内容の選択ができるようにしてはどうかなど、実施内容を作るのに苦慮しながらも工夫している。

（表2）は、平成12年度の「ふれあい体験学習」の実施要綱である。

平成11年度より取り入れた漁師による講演は、豊かな漁業経験と飾り気のない生きた話しぶりで、小中学生には大変好評であった。さらに、漁師の人生体験談ともなると、熱弁になり、時間オーバーもおかまいなしであった。

中学生を対象としての「海洋深層水」の講演は、今注目されているだけに、生徒の関心も思いのほか高く、興味を持って聞いていた。また、この日のために取り寄せた深層水から作られた塩、化粧品、飲料などの実際の製品を見て、何かを感じていたようである。

魚の調理加工は出来上がりの結果が出るだけに、子供達が最も真剣に取り組む場面である。魚好きになるには、親や子供が嫌がらずに魚に触れ、魚に慣れ、調理できることが大切ではないだろうか。実習では小学校低学年にも包丁を持たせたが、研究会員、婦人部総勢で親切、丁寧に教えたので、何の心配もなく終わることができた。また、さすがに経験豊かな高学年は包丁さばきも上手で、きれいに早く調理ができた。これは体験学習における積み重ねの成果であると思われる。

中学生の県漁業指導船「苗場」への体験乗船では、船内設備の説明や、沖での海洋観測実演があったが、30分では物足りない様子であった。また、顕微鏡による魚の鱗やプランクトンの観察、養殖ヒラメへの給餌などは、全てが初めての体験のようで、子供達は喜び

と充実感を得ているようであった。

中学生の女子による料理実習では、参加者約 180 名分の試食品を用意したが、経験を積み重ねた漁協婦人部の指導のもと、手際よく料理が出来上がっていき、普段学ぶことのできない体験となったようである。当日は大漁汁、揚げ物、煮物など全てが海のものばかり、みんなで作り、みんなで食べた愛情の料理は子供の好みも変える力があるらしく、とても家庭では想像もできないような食欲の様子が見られ、魚離れなど思いたくもない、そんな気持ちにさせられる試食会となったのである。

6. 波及効果

今年度の「ふれあい体験学習」が終わって間もなく、中学校から「総合学習」についての協力依頼があった。生徒が自ら設定し取り組む課題では、ぜひ水産を取り上げたいということであった。そして、後日次年度に向けての意見交換会が開催され、これには研究会、婦人部が参加し、意義のある時間を持った。また、「水津で獲れた新鮮な魚を使った郷土料理を知りたい」との生徒たちの希望から、昨年末に家庭科の授業において、婦人部を講師として郷土料理講習会が開催された。さらに、今年 8 月には姉妹都市である埼玉県入間市の中学生を交えて漁業体験学習が開催される予定である。この他、最近は小学校からも漁業体験の講話や、魚を使った料理講習会に関する依頼が多くなってきている。

「継続は力なり」ということわざがあるが、学校教育においても地域の主産業である水産業の必要性が理解され、生徒達が自ら取り上げた「水産」というこれらの課題は、9 年間継続した「ふれあい体験学習」と大いに関連があるように感じられた。

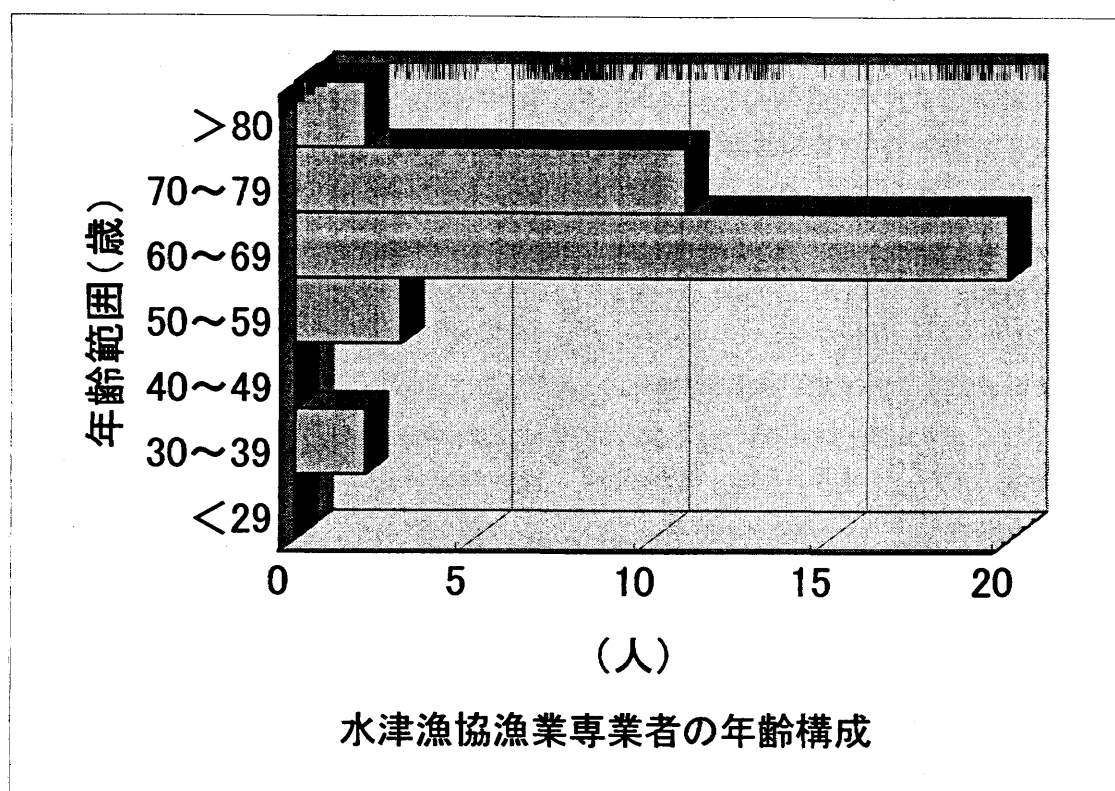
子供達に海や水産についての知識を深め、体験してほしい、魚好きになってほしい、将来後継者となることに夢を託したい、こんな願いで取り組んだ「ふれあい体験学習」も平成 5 年から数え 9 回目を迎えた。仕事を休み、経費を出し合って頑張っているが、会員の誰一人からも止めようという声は挙がらない。この体験というものは孫や子供達が学校や家庭だけでは学ぶことのできない貴重なものであること、また、海辺で育った子供達だけに与えられた特権であること、それらを教えることができるのは喜びや誇りであり、子供達の感謝の気持ちの表れをみると、充実感で満たされ、なぜかこの「ふれあい体験学習」を継続することが研究会や婦人部の使命のような気にさせられるのである。

7. 今後の課題や計画と問題点

- ① 研究会員の高齢化も進み、人材不足が目に見えているため、体験学習を継続するには会員以外の人達の協力体制が必要である。
- ② 体験学習だけで終わるのではなく、小中合同での「ふれあい体験学習」の「体験発表会」を実施すれば、管内組合員の理解をより一層深めるのではないかと考えている。
- ③ 体験内容について、高学年には選択性も組み入れ、生徒の意思を尊重することも必要と考えている。また、必ず取り入れている調理加工の体験には即席で調理場を作って対応しているが、体験型修学旅行の受け入れなど、多目的に使える「体験のできる施設設備」が欲しいと思っている。
- ④ 一口に「後継者づくり」というが、実際には非常に難しい課題であるので、休日、夏休み等を利用し、内容をより深めた漁業体験ができるようにするなど工夫を重ね、地道であるが、後継者づくりに向けた積極的な取り組みを継続していくことが今後の課題である。

表1 水津漁協漁業專業者年齢構成

年齢(歳)	人数(人)	%
>80	2	5.3
70~79	11	28.9
60~69	20	52.6
50~59	3	7.9
40~49	0	0.0
30~39	2	5.3
<29	0	0.0



(表2)

第8回ふれあい体験学習実施要領

(主催) 水津漁業研究会・水津漁家婦人部
 (後援) 水津漁業協同組合・新潟県佐渡水産事務所・新潟県水産海洋研究所
 (日時) 平成12年5月23日(火) 午前9時～午後12時40分
 (場所) 水津漁業協同組合
 (対象) 前浜中学校(29名) 岩首小学校(17名) 野浦小学校(11名) 片野尾小学校(21名)

(内容) (1) 講演

①刺し網漁業について(小中) 水津漁業研究会 三国屋 寛

②深層水について(中) 新潟県佐渡水産事務所

(2) 体験実習

①加工実習(小) 水津漁業研究会 水津漁家婦人部

②体験乗船(中) 新潟県水産海洋研究所 漁業調査船 苗場

③顕微鏡観察(小中) 佐渡水産事務所 新潟県水産海洋研究所

④ヒラメ給餌(小) 水津漁業研究会 小坂 学

⑤魚料理実習(中) 水津漁家婦人部

(3) 昼食試食会

(日程)

9:00～9:15 開会 あいさつ 椎研究会長 小坂水津漁業協同組合長 佐渡水産事務所
日程・内容説明

9:15～9:35 講演

(9:15～9:35) 刺し網漁業について 三国屋 寛 (小中) (小学生移動・準備)

(9:40～10:10) 深層水について 佐渡水産事務所 (中)

9:50～11:15 体験実習

(9:50～10:30) 加工実習 ホッケ・イカ (小)

(10:40～11:15) ヒラメ給餌 → 顕微鏡観察 (小)

(10:20～11:20) 県漁業調査船苗場体験乗船 (中)

中学生女子10:20～10:50 中学生男子10:50～11:20

(10:20～10:50) 加工実習 → 顕微鏡観察 (中)

(10:50～) 魚料理実習 (中)

11:30～12:30 昼食試食会準備

11:40～12:30 昼食試食会

12:30

閉会 講評 佐渡水産事務所 挨拶 野浦小学校長 前浜中学校生徒会

(実施方法)

◎加工実習

各学校毎に実習に入る。

(魚) 三枚おろし → 洗う → 塩漬け → 乾燥

(イカ) 開く → 洗う → 塩漬け → 乾燥

◎指導担当

体験項目	学校名	担当者	備考
加工実習	岩首	平岩 日和山 平 佐藤 山中 宇治金 婦人部	低学年包丁まな板は研究会でそろえる。
	野浦	本間 笹井 三国屋 臼杵 坂下 婦人部	指導担当者は各自でまな板をそろえる。
	片野尾	氏 宇治昭 岩見 大坂 坂野 惣賀 婦人部	
ヒラメ給餌	全小学校	小坂 山中	
顕微鏡観察	全小学校	水産事務所	岩首→野浦→片野尾小学校
	前浜男子	水産事務所	
苗場体験乗船	前浜	佐藤(伸) 坂 宇治忠(銀鮭説明)	
魚料理実習	前浜女子	婦人部	①大漁汁②焼き物③揚げ物④煮物

◎昼食

試食会 屋外 場所は各校で作る

汁容器 小皿 シートは各校でそろえる

◎全体進行

椎 小坂 津村 下谷

(参加予定人員178名)

岩首(17) 野浦(11) 片野尾(21) 教員(40) 研究会(25) 婦人部(20) 水産事務所(4) 苗場(6) 他(事前準備)

①加工

おけ、籠、廃棄物入れ、まな板、乾燥枠、塩、調理台、包丁

②昼食

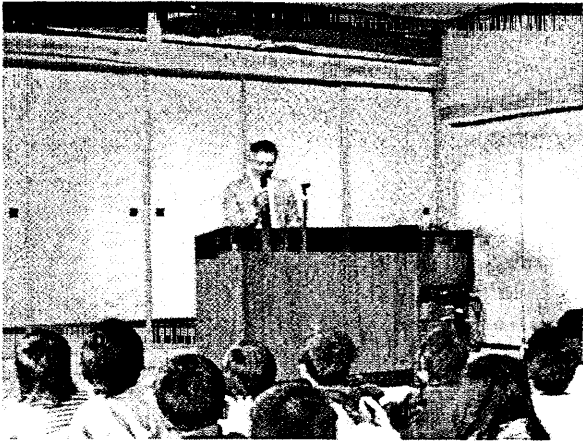
シート、ガス台、どんぶり

③その他

携帯マイク、敷物入れ、手洗い場所

④材料

加工、昼食



話に集中



調理加工実習



低学年には丁寧に指導



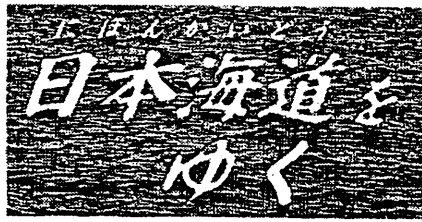
深層水によるボタンエビ飼育実験の見学



婦人部と試食会の準備



みんなで試食会



第5部

佐渡・水津
魚に生きたる

△6▽

毎年五月下旬、両津市「ふれあい体験学習」水津の水津漁協に、地元の子どもたちの歓声が響きわたる。漁港を舞台に、岩首、片野尾、野浦の三実際に漁師などから魚のさばき方を習い、とれたての新鮮な海の幸を味わう「ふれあい体験学習」だ。昨年、前浜中学校と小学校から約八十人の生徒、児童が参加。ホッケの開き作りなど魚の加工だけでなく、具漁業指導船の体験乗船、海洋深層水に関する学習も新たに加えられ、内容の充実も図っている。

ふれあい体験学習

海の担い手育てたい



漁師や地区婦人部などに教えられ、自分たちでさばいたイカを天日干しにする小学生。昨年5月下旬、両津市水津の水津漁協前

手にしたり、釣りをすると魚のおいしさを知って子どもも少なくなっている「ほしい」（前会長の権賢二さん）と、七年前からこうした現状を心配し始めた。同漁協の組合員らで、同学習を漁協関係者だつくる漁業研究会が「海けでなく、地区婦人部など住民総出で盛り上げる背景には、「ゆくゆくは漁業の担い手に育ってほしい」との思いがある。また、子どもたちが学習を通じ、ふるさとを理解することは、確実に将来の人生に役立つはず、という声もある。「成長してから、水津に目を向ける土台作りに役立つでしょう」（加藤教諭）。

漁港で遊んでいた子どもたちは「魚はヌルヌルして気持ち悪かった。でも、魚を開くのは初めてで楽しかったよ」「また行きたいな」と元気に話していた。今年もまた、学習の日近づいている。権さんは「今回は実際に、網から魚を外す作業をやらせてみようかな」と、子どもたちの笑顔を思い浮かべ、準備を急いでいる。

(おわり)